

## G-8 多賀城市八幡地区

2012年1月17日(火)

---

報告者名	菊地 暁	被調査者生年	1946年(男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	不磷寺住職
補助調査者	赤尾 智宏		

---

### 話者情報

話者は、昭和21年5月22日に八幡で生まれた。明治大学で考古学を専攻、卒業後、宮城県多賀城跡調査研究所で7年間公務員として働き、公務員を辞めてから、しばらくは副住職、幼稚園の園長を兼務した。不磷寺の住職を50歳のときに父から譲られた。

話者の妻は岩泉出身、岩泉高校の郷土研究部に入っており、発掘調査で知り合った。妻の母親の家は、宮古の普代村にあり、三陸津波で全滅した。妻の母親の家系はミコ、父親の家系は山伏だった。

話者の祖父は、臨済宗妙心寺派の本山の役職を就いていた。全国を行脚しながら、七十七銀行のオーナーなどをスポンサーに集めて、政宗の菩提寺である瑞鳳寺が荒廃していたのを建て直した。現在、話者のいところが瑞鳳寺の住職をしている。

話者の父親は、大正3年に仙台市宮城野区中野、臨済宗妙心寺派の誓渡寺の4男として生まれた。臨済専門学校(花園大学)を卒業後、瑞巖寺で1年半修行し、不磷寺に入るよう言われるが、1度は断った。中国で軍の特務機関として働いたが、話者の出産のため日本に戻り、不磷寺の住職となった。

話者の母は、大正11年1月23日に原町の陽雲寺の10番目の娘として生まれた。

### 不磷寺

不磷寺は、天童家移入以前、八幡氏の最後の当主によって建てられた。一方で、瑞巖寺91世によって建てられた、沼向にあったなど、建立時期には諸説ある。

その後、天童家が入ってきたため、八幡氏は水沢に移った。不磷寺も、近隣の寺に吸収されそうになったが、豪農達によって存続してきた。大正年間、塩釜の慈恩寺の住職が、兼任していたらしいが、ほとんどここに来ることはなかった。昭和18年8月の地蔵盆のとき、話者の両親が無住だった不磷寺に入った。

平成9年に本堂を修復した。本堂は、昭和6年に町の大工によって建てられた。宮城県沖地震のときには崩れる危険があると言われていた。かつては、庫裡が茅葺き屋根だった。本堂を幼稚園として使っていたこともある。

本尊は地蔵である。何度か盗まれており、そのため、本体と光背の位置がずれている。

## 被災状況



写真 ナナホンボトケ

不磷寺は、裏山を削って岩盤の上に建っているため、お墓が1基倒れただけで揺れによる被害はほとんどなかった。津波も駐車場までだった。「浪こさじとは」の古歌の通り、近隣住民は末の松山の高台に逃れた。

話者の妹が園長をしている桜木花園幼稚園は、2mの津波が直撃したが、2階は助かった。話者が園長をしている八幡花園幼稚園は、10cm程の床上浸水ですんだ。檀家で亡くなったのは、幼稚園の保護者など、親が子供を迎える途中で津波によって流された人。亡くなった方は2桁に満たない。

寺には多い時で40~50人の避難民がいたが、4月3日午前中で退去していただいた。中にはアパートが無事にもかかわらず居座っていた「偽難民」もいた。

普段は葬祭会館を使うことのほうが多い葬儀も、津波の犠牲者で一杯だったので、寺で行った。震災1ヶ月後に火葬され、そのときは葬儀と四十九日と百カ日を合わせて行った。仙台では、葬儀のときに百カ日法要まで一度にやる慣習があるが、話者は百カ日を葬儀に含めず、「妥協して」四十九日の法要までやることにしている。東京では初七日、東北各県は三十五日を葬儀と合わせてやる。

裏の墓地には、ナナホンボトケ（七本仏）という初七日から、四十九日までのボトケサンが書かれた塔婆がある（写真）。本来は1本ずつ塔婆を分けるが、7本の塔婆を合わせて1つにしてある。これは、葬祭業者が用意する。

## 不磷寺の檀家

八幡には、不磷寺と同じ宗派（臨済宗）の宝国寺があり、八幡の住民の多くはどちらかの檀家となっている。檀家の数も半々ぐらい。話者の両親が不磷寺に入ったときは、檀家は50~60軒しかなかったが、多賀城市の人口が増加したこともあり、今はその8倍になる。檀家の3分の2は他所から来た人であり、もともとの檀家とそのベッカ（分家）を含めても全体の半分も満たない。

古くからの檀家に、江口家がある。江口家は、もとは八幡氏に仕えていた豪農であり、天童家の配下になるのを嫌い、野に下った家である。かつては、財産を減らさないようにベッカを出さないようにしていたが、江口家は新田開発の関係で財産ができたため、ベッカを出すようになった。中山家、赤間家も元からの檀家であり、互いに婚姻関係を結び、ベッカを出さないようにした。戦後になってベッカが出た。

中山家も古くからの檀家であり、豪農だった。天童家より立派な屋敷を建てたことにより、破門された。破門を許してもらうために随分土地を寄進した。天童家とそれ以前に住んでいた家は敵対関係にあると言う人もいる。

最近まで、宝国寺と不磷寺の檀家同氏は婚姻関係がなかった。不磷寺の檀家である沼向の引地家と菊田家との間にも婚姻関係がない。

8月24日に地蔵盆がある。この辺りでは、不磷寺と宝国寺しかやらない。不磷寺の入り口にある地蔵の前でお勤めをして、盆で使用した提灯を納める。主に年配の女性が参加する。夜になると、青壮年部が主催で、駐車場でビンゴゲーム、綿あめ、かき氷、金魚すくいなどの夜店が開かれる。

中世以来の村落があった、仙台港の近くの沼向では、女性のヨイマツリがある。高齢の女性が主に参加しており、女性が主役で男性が準備を担当する。20年前から、話者と父親が沼向の地蔵堂に拝みに行くようになった。現在は、地蔵堂が元の場所から引地氏の屋敷に移された。

節分の日には、1時くらいから集まり、お経を読んでいる間に餅つきが始まり、やがて参加者に餅が振る舞われる。一通り終わると広間に移って宴会が始まる。青壮年部により年々工夫され、今では2トン車のトラックを2台つけて、紅白の垂れ幕を張り、豆まきをするようになった。

話者が小さい頃は、盆に砂押川で灯籠流しをしていた。宝国寺が何十年ぶりに復活させてやっている。

4月29日、大回向を毎年行う。伊達藩の貧乏寺が、春、秋の彼岸のほか収入がなかったため、新たな収入源として回向を公認したのが各地の寺に広まった。付き合いのある住職を十数人呼び、通常の法事と同じお勤めをする。お勤めの後、会食があり、檀家の女性による手作りの料理が住職に振る舞われる。かつては檀家の女性を作っていたが、手作りは住職のみであり、それ以外の檀家は弁当屋さんに頼む。話者の母親のときから回向はやっていた。4月30日から5月の連休の間は別の寺のお勤めに話者が行くこともある。震災のためすべてを自重しようという考えもあったが、話者は少しでも正常に戻りたいと考え、昨年も例年通り大回向を行った。

旧暦9月27日に、鎮守嶋観音の祭がある。話者は、鎮守嶋観音の前でお勤めをし、その後宴会がある。鎮守嶋観音は、管理者である菊地源三の屋敷にあったが、市道の拡張で置き場所がなくなり、昭和62年に不磷寺で祀ることになった。かつては、観音講があり、宝国寺の檀家が講の主体であった。鎮守嶋観音の近くには光徳院という寺があったが、廃仏毀釈でなくなった。

4月8日の降誕会、悟りを開いた日である12月8日の成道会、2月15日の涅槃会の三仏忌は、この辺りのお寺ではあまりやらないが、不磷寺では行う。

### 契約講と葬儀

ほとんどの契約講はなくなったが、八幡の沖地区には残っている。不磷寺は契約講に入っていない。話者の小さいころは、葬儀のときに契約講が関わるがあった。そのとき、葬儀で使用する契約旗があり、宝国寺と兼用だった。

かつては、契約講がお通夜で百万遍を唱えていた。その時に使用していた「弘化」の年号が刻まれた数珠は今でも残っている。

寺で葬儀があるのは珍しく、関西系の葬儀社ベルコに依頼する家が多い。家によってはベッカも含めて、代々同じ葬儀社に頼む家もある。八幡では、ゴンキモノ（ふざけている人）という屋号から「ゴンキ屋」と呼ばれている塩釜の葬儀屋を昔から利用する家がある。